

科学研究費助成事業（基盤研究（S））中間評価

課題番号	18H05290	研究期間	平成30(2018)年度 ～令和4(2022)年度
研究課題名	広汎な観測に対する因果性の導入 とその最適統計推測論の革新	研究代表者 (所属・職) (令和2年3月現在)	谷口 正信 (早稲田大学・理工学術院・教授)

【令和2(2020)年度 中間評価結果】

評価		評価基準
	A+	想定を超える研究の進展があり、期待以上の成果が見込まれる
○	A	順調に研究が進展しており、期待どおりの成果が見込まれる
	A-	概ね順調に研究が進展しており、一定の成果が見込まれるが、一部に遅れ等が認められるため、今後努力が必要である
	B	研究が遅れており、今後一層の努力が必要である
	C	研究が遅れ、研究成果が見込まれないため、研究経費の減額又は研究の中止が適当である

(意見等)

本研究は、Granger 因果性などを含む高度な因果指標を極めて一般的な乖離度から導入してデータ科学における今まで捉えられなかった潜在要因の統一的指標を提案するものである。

高次元統計系列観測データに関する各種推定量や推定方法、関連する検定統計量、因果性に関する検定理論など、幅広い研究成果を創出している。さらに、それらをトップジャーナルにおいて公表されるとともに、国際会議等における招待講演が多数行われ、さらには、進んで国際的な研究集会も開かれている。因果性を評価する一般的な乖離度を導入して潜在要因の統一的指標を提案するという本研究の最終目標に向けて、今後の更なる探求と、これまでに得られた研究成果に基づき目標達成への見通しが明らかにされることを期待する。